遊びと余白

遠藤興一

松島さんは院生だったころ、新明正道さんから、「詩人肌の松島君は、文学青年だねぇ」と言われたことを、いつか聞いたことがあります。さすがに大家は違う。その後の松島さんを言い当てている。若いころの松島さんは、フルマラソンに出場する体力の持ち主だった。それがいつしか中年になり、お互い「ファイト、一発！」とはいかなくなると、関心も趣味も変わってきたように思う。いつのころからか、イメージが変わるようになった時期がある。あれはいつごろだっただろうかねぇ。

譬えが間違っているかもしれないけれど、認識の学問から、実践の学問に、その姿勢を変えたころではないだろうか。私の研究分野でいえば、「臨床の知」に目覚めた松島さん、といったところでしょうか。授業にヨガを取り入れたり、バーチャルリアリティの世界に踏み込んだりしたときがあった。たしか、中沢新一はおもしろいよ、と語っていました。やがて、絵画の世界と出会ったのは、それほど後のことではなかった。心の開放を絵画の世界で表現する松島絵画の登場です。自由、気ままに、心の赴くままに筆先を動かす松島さんはまさに、絵の世界を漂い、遊んでいる、そんな姿を我々の前に見せるようになった。戯れと遊びの精神、余白をとることの妙。これはもう『梁塵秘抄』の世界である。

おもしろいなぁ、やるなぁと感心しつつ、しかし俺にはできないという、嫉妬と羨望の念に囚われたこともあります。じつは中年になって、ことさら心身のバランスを保つことの必要な時期、俗に厄年と言うんですか、そんなときわたし、気功太極拳に凝ったことがあります。これには余談があり、故社本さんが体調を崩して苦労していたときにお互い、気功についてかなり突っ込んだ話をし、情報を交換したことがあります。そこから超能力の世界まで、目を輝かせて語り合ったことがあります。こんなこと、非科学的だとおっしゃる向きには駄弁ですが、我々は実に夢中になった。まるで子供でしょう、そう、あの頃は子供だったわけ。多分、そこに松島さんがいたら、まちがいなく我々の仲間に入っていたと思います。

中年から老年になるころ、着々と取り組んでこられたのは本業の社会学、それも文学社会学ですね。始めのころはどちらかといえば言語論かな。松島さんの文章には、しばしば吉本隆明が登場。望月さんとの共著もたしか、その方面の研究ではなかったか。それがいつしか「えんどうくん、たわらまちは、なかなかいいよ」と語りかけるようになって、ジャンルに囚われない文学を社会学的に分析するようになった。いや、本当はずっと昔からやっていたのかもしれないけれど、わたしにはそう見えたということです。文学社会学といえば、共通の大先輩として川本彰さんがいます。松島さんの社会学はそれとは大きく異なって、大先生は志賀直哉、島崎藤村といった近代文学の主流を対象にしていたけれど、松島さんは沖縄をはじめとしてかなりマイノリティ、辺境の文学に力を入れてこられた。

さて、はじめの話に戻ります。松島さんとは付き合いが長いわりに、お互いの世界に踏み込むようなことはなく、言ってみれば世間話、与太話で終わってしまったかな、と思います。口角泡を飛ばして議論するというよう

なことは、ただの一度もなかったデスよね。それがまあ、なんというか松島ワールドというか、独特の雰囲気を周囲に与えていた。わたしはただそれが好きで、ふうん、へえ、そう、という気のない返事ばかりだったように思うし、失礼なことだったと思うけれど、結構楽しんでいました。

しかしまあ、お互いに歳をとりました。一方は白髪のロマンス・グレーで、もう一方は禿げ頭のメタボ老人です。このあいだ、テレビで「徹子の部屋」をみていたら、偶然細川俊之がでてきて、黒柳徹子と話をしているのを見て、泣けてきたね。彼、言葉が不自由で、うまくしゃべれない。われわれの世代では、ダンディで二枚目の代表的存在だった彼をおもえば、まさに「月日は百代の過客」です。おたがいに元気で長生きしましょう。ん、長生きなんてしたくないって？　そうかもね。人生、長ければ良いってものじゃない。そこがまた、松島さんらしい。